

アキナイくらし

CLTで蔵づくりと暮らしづくり



CLTの蔵空間(カフェ側)



裏庭とCLT縁側&家具



CLTの蔵空間(入口側)

01 商いと暮らし

高齢者のためのより暮らしの場を考えた時に、迫力のある大架構のCLT建築ではなく、たとえば庭木に水をやるように手入れができ、徐々に愛着が湧くような親しみのあるCLT建築を考えた。そこで焦点に当たったのはCLT建築が地域の課題や想いに寄り添うことである。計画する施設は、高齢者(60-80才のアクティブシニアを想定)の共同住宅で、居住者が「商い空間」を通して近隣住民、観光客、イベント参加者等と関わりを持つことができ、訪れる人皆で建物に手を入れながら、地域の文化の発信拠点ともなる場所である。

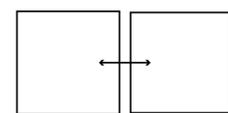


02 敷地と背景

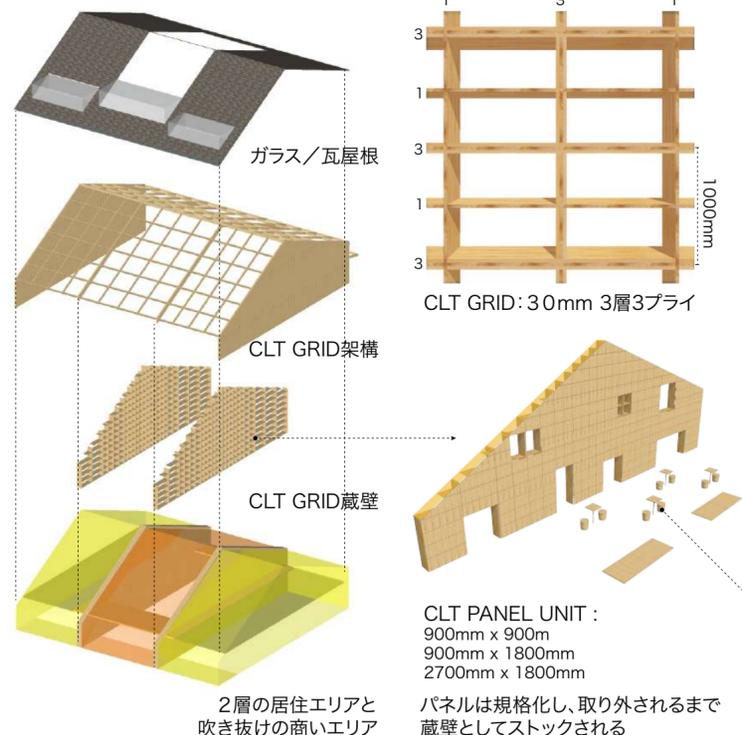
川越一番街の歴史保存地区を抜けたすぐ先の土地を敷地として選定した。観光地で有名な蔵造りの町並みの雰囲気はまだ十分に感じられる位置で、観光客の足並みは減少するが、その分地域住民とのつながりが持ちやすい場所である。そもそも「蔵造りの町並み」の起こりは明治26年の川越大火により中心部の1300戸が全焼する中で、土壁の蔵造りが消失を免れたことで生まれた「耐火建築」に対する羨望であった。こうした理由から蔵の土壁の厚みは30cm~50cmと分厚いものが建設されたが、当時200棟を超える蔵造り建築も現存するものは30数棟あまりである。蔵造り建築の維持・保存に対して、市は「伝統的建造物群保存地区保存整備事業」の枠組みを定め補助を行っているが、現実の工期の長さ、施工コスト、職人不足等の問題は蔵造りを維持保存、あるいは建て直そうとする個人にとっては依然として高いハードルとなっている。

03 CLT蔵による工程の短縮

CLTをGRIDに組み、二層吹き抜けの「CLT蔵」を構成、パネルを取り付け木造の蔵造り建築を完成させる。この耐火性能を有する木造のCLT蔵は、川越の蔵造りと同じく「店蔵」として前面道路へオープン可能にし、さらには裏庭へも連続させる。この蔵の外両側に高齢者用居室を配置、蔵の商い空間に自由にアクセスできる構成とする。CLTの蔵壁は構造体として屋根を支えるだけでなく、大小スラブのはり出しが高齢者と来訪者との関係を演出する。

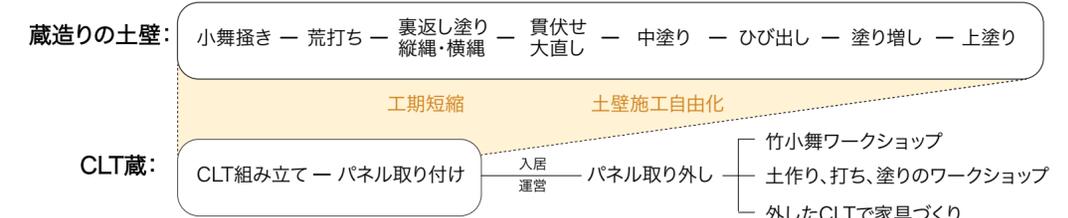


蔵は土間や通り庭のようにつくり縁側とともに裏庭までつながる



04 CLTパネルの転用と土壁のインストール

蔵造りの厚い土壁を伝統工法に乗っ取って施工すると3年はかかると言われていた。そこで、まずはCLTGRID構造による蔵壁とパネルにより高齢者の入居を可能な状態まで施工してしまい、土壁は入居者が任意のパネルを外してあと施工できるようにする。各々数ヶ月を要する土づくりや塗り、ひび出しの過程は居住者と近隣住民、観光客が皆で共有していく。



CLTが構造を負担するため、土の荒打ちを省略して薄く土壁を作れば商品を展示する棚が残り、竹小舞をすかし窓として用いたり、長い時間をかけて土を塗り重ね、川越の蔵造りのような厚い土壁をつくることもできる。パネルは規格化し、取り外してベンチやカフェの椅子へ、大きいものは会議室用テーブルや縁側スラブの拡張などに転用する

